

内藤湖南・小島祐馬関連略年表

	内藤虎次郎関係	小島祐馬関係
慶応2(1866)年	8月内藤虎次郎生まれる	
明治14(1881)年		明治14年12月小島祐馬が生まれる
明治24(1891)年	6月三宅雪嶺らの政教社『亜細亜』(『日本人』改題)編輯	
明治26(1893)年	1月大阪朝日新聞の客員(主筆格)に転じた高橋健三の私設秘書	
明治27(1894)年	7月大阪朝日新聞記者	明治27年日清戦争に関心を持ち学校で新聞購読
明治29(1896)年	4月「関西文運論」連載 8月郁子と結婚 12月大阪朝日新聞社を退社	
明治30(1897)年	1月『近世文学史論』(「関西文運論」改題)刊行	
明治31(1898)年	1月畑山呂泣の病氣見舞いのため『台湾日報』の台北から帰国、その月呂泣死去。4月台湾日報を退社し東京小石川区江戸川町に住まう。5月『万朝報』論説記者	
明治32(1899)年	3月小石川の家を火災で焼き蔵書を失う。4月長男乾吉誕生。9月から北清・長江地域を遊歴	
明治33(1900)年	6月『燕山楚水』を刊行、7月大阪朝日新聞社に再び入社	明治33年9月五高に進学
明治34(1901)年	4月京都帝国大学附属図書館を訪問、狩野直喜・島文次郎・織田萬らと会う	
明治35(1902)年	10月北清・江浙地方を巡遊。杭州で文瀾閣四庫全書や丁氏八千卷樓の蔵書をみる	明治35年冬から翌春五高在学中上海から漢口まで旅行、湖南『燕山楚水』を携行
明治36(1903)年		明治36年京都帝国大学法科大学に入学するも病気で一年間休学
明治38(1905)		明治38年京大法政専門学校附設東方語学校に入学、時文授業担当は狩野直喜
明治39(1906)年	2月参謀本部の依頼で間島問題の調査書を作成。外務省より間島問題調査の嘱を受け7月大阪朝日新聞社退社。12月文科大学長狩野亨吉と面会し京都帝国大学文科大学教授就任を承諾	
明治40(1907)年	10月 文科大学講師。11月 父十灣を京都に招き頼山陽の山紫水明処を見学	明治40年7月法科大学を卒業し清国に渡るも間島問題勃発し翌年4月帰国
明治41(1908)年	3月 父十灣死去し毛馬内仁叟寺に葬る	明治41年5月深瀬正壽子と結婚
明治42(1909)年	9月 文科大学教授、11月羅振玉の報告でペリオの敦煌文書発見を知る	明治42年京都帝国大学文科大学哲学科へ再入学し支那哲学史を専攻。夏前に河上肇宅を訪問
明治43(1910)年	9月 狩野直喜・小川琢治らと北京に出張して敦煌文書を調査	
明治44(1911)年	11月 羅振玉・王國維ら京都に亡命	
明治45(1912)年		明治45年7月文科大学哲学科を卒業、9月京都府立第一中学校嘱託教師
大正11(1922)年		大正11年8月京都帝国大学文学部助教授に就任
大正14(1925)年	4月「大阪の町人学者富永仲基」講演、9月小島祐馬・神田喜一郎と宮内省図書寮を調査	
大正15(1926)年	8月京都帝国大学教授を停年退官	
昭和2(1927)年	8月 瓶原村の恭仁山荘に隠棲	
昭和6(1931)年		昭和6年3月文学部教授、支那哲学史講座を担任
昭和9(1933)年	昭和9年6月26日 恭仁山荘で死去、29日法然院に葬られる。のち毛馬内の仁叟寺に遺髪塔	
昭和12(1937)年		昭和12年10月富永仲基追遠法会、架蔵の図書を出品し祭文を読む
昭和16(1941)年		12月京都帝国大学教授を定年退官